

昭和46年2月1日第3種郵便物認可
平成16年9月1日発行「毎月1回1日発行」
俳句雑誌 沖 第33巻第9号

俳句雑誌「おき」



9月号



沖
発行所

風の夏

林 翔

薔薇 香り 有事 といふは何時のこと

枝も葉も風の揺り籠ねむの花

風吹きぬ今夏菊の存在感

六月六日

木の梢うれが風と撥り夏の月

題付き・題無し

同人作品のうち、蒼茫集の作品にはすべて題が付くが、潮鳴集の作品は、選者が佳しと認めた作品にだけ題が付き、他は無題となる。これは前主宰登四郎氏が創められた方法を踏襲しているのだが、登四郎氏が何時から創められたのかと調べてみると、同人制を敷いた一年後、昭和47年1月号からであった。それまでは同人欄が潮鳴集だけだった時代である。47年1月号では初めて蒼茫集が設けられ、三浦青杉子・久保田博・福永耕一・今泉宇涯・中島秀子・高瀬哲夫の六名が蒼茫集同人。潮鳴集で題付きになったのは、吉田利徳・小林冬日子・鈴木良花・中島富雄・岡本富子・大畑善昭の六名で、他は題なしであった。右の内、良花は良戈の旧名である。冬日子氏・富雄氏・富子氏は既に他界されている。同号では題が付かなかった九名の中でも健在なのは都筑智子・今瀬剛一・

六月二十八日

風死せり 細莖細葉じつと耐へ

誰が拾ふわが掌滑りし落し文

庭師去りしあと青梅のころころと

おふざけの水割り新茶うつくしき

「夏物半額」さびしき時が始まりぬ

これよりは蝸タイムいざ庭へ

原教正・鈴木鷹夫の四氏だけだ。

同号の潮鳴集から若干抽こう。

空蟬の壊こわえてゆくをながめゐる

吉田利徳

秋蝶のすがるる色の運河越す

鈴木良花

井戸端に置くうすらひの樽四五基

大畑善昭

木の実落つ一つ弾みてころがりて

都筑智子

残菊の蜂は虚空に行き所無し

今瀬剛一

熊手の柄あをあをと甲斐冬に入る

原教正

婆ゆきて鴉を翔たす冬川原

鈴木鷹夫

林 翔



南千住界隈

能村 研三

美術館めぐり

浄閑寺

墓 涼 し 若 絮 は 遊 女 の 名

木 下 闇 畳 紙 包 み の 荷 風 塚

首 洗 井 戸 の 辺 こと に 蟬 時 雨

初 風 や 写 真 館 う ら の 都 電 駅

この秋、市川に初めての美術館がオープンする。その管理運営を私が勤める文化振興財団に任されることになり、開設に向けての準備で大忙しだ。

そんなことで、わずかな時間をみつけて夏休みをいただいた。プライベートの旅行をしても、ついその旅先の美術館や文学館に自然と足が向いてしまう。

八月の初め所用で金沢と能登に旅行した。金沢はさすがに文化の香り高いまちで、美術館、文学館そして文学詩碑がまち中に点在していて、訪れるたびに少しずつ見るのを楽しみにしている。今回は、室生屋星が幼少時代を過ごした犀川のほとりにある兩宝院と室生屋星記念館を訪れた。一、二階の吹き抜け部分には年代順に詩集の初版本が並べてあった。展示室には屋星が書いた書簡、原稿、初版本なども展示され、萩原朔太郎など屋星のもとに集まった仲間たち

二た三駅都電の涼に街のぞき

今朝秋の絵馬掛銀杏軽きかな

百日紅翁首^{かど}途^でのころざし

新蕎麦に大根おろしのうすみどり

休暇明け胸を支へに運ぶ本

黒松に塀割られて厄日前

の軌跡をたどることができた。
お盆休みには、いつも家族と軽井
沢に行くことにしているが、今年は、
深沢紅子美術館と軽井沢高原文庫、
さらには追分の堀辰雄文学記念館に
行った。どこも軽井沢にふさわしく
自然を満喫しながら美術や音楽に触
れることができた。追分にある堀辰
雄文学記念館は大きな庭に晩年を過
ごした住居と愛蔵書を取めた書庫な
どがあり、この家の居間から病苦と
闘いながら庭を眺めていたのだろう。
この夏は多くの文学館や美術館を
巡り堪能できたことは有意義であつ
た。



能村研三

蒼茫集



岬の鼻

河口仁志

蟻が曳く白帆のやうな蝶の羽
万緑の包み余せし岬の鼻
鳥の眼となつて覗きし蟬の穴
耳打ちの一語香水匂ひけり
赤裸の子呼べばすたこら遁走す
幹移るめくら飛びして夜の蟬

黒の垂直

中尾杏子

網戸入れ独りの煮炊きけぶらす
音立てて石が水吸ふ原爆忌
被爆碑の黒の垂直蟻が這ふ
夏ふかむ子の血管へ電気メス
看取る子のかひな細れり縷紅草
手花火や術後の黒髪ゆるく巻き

虹

北川英子

かの虹の雫か少年濡れ戻る
雲海のしづかに孤峯呑まんとす
のびるだけ伸び向日葵の青つぼみ
朝焼より現れて不眠の戻り漁船
小さくも片翹づつ鷺草の孵化
完璧のまだ濡れぬるか蛇の衣

木 晩

田所節子

新樹林映して池の深くなる
天に風地に岩擱む樟新樹
空のごと木晩に池の光りをり
登山小屋ぴくりともせぬ子の眠り
小深山かたばみ米粒ほどの花涼し
落梅掃く音のみ朝の荒行堂

潮鳴集

峰雲がくれ

坂本京子

リフトもう峰雲がくれ手を振りても
梔子やつくづく妥協なき香り
胸中にとどこほるもの水を打つ
遠き日のまばたく線香火花かな
皮脱ぎて満を持したる竹のいろ

加 齢

秋葉雅治

甚平や加齢自賛の盃かさね
耐へ耐へて知床はいま滴れり
洗ひ髪に杯あげむ汝が誕生日
暮るるほど舞妓まぶしき川床涼み
回峰行汗の余滴を拝受せり

生 業

細川洋子

汗ばみて生業屈むこと多し
星擦れの音か七夕竹そよぎ



遣る気とは何処より湧く雲の峰
問はず語りの風くるところ夕端居
おつとりとせしが鬪魚を好みをり

湧きあがるもの

岡崎

伸

ころにも湧きあがるもの雲の峰
枇杷たわわわが半生の職終る
生き急ぐとは夜半も鳴く蟬のこと
荒馬の背に立つごとしサーファーは
近道を許さぬ構へ青芒

マヌカン

古屋

元

高階の部屋のもてなし風青し
マヌカンの黒き全身黄の水着
真二つを囲む瞳の数西瓜切る
緑蔭をレントゲン車のはみ出せり
薫風や一斉に繰る答案紙

沖作品



能村研三選

甚平の自在のなかに居て不安

石川

林 昭太郎

炎昼や東京といふ巨き筒

透明な翅に影あり原爆忌

音もなく海へ陽の没る大暑かな

扇風機止まりて見ゆるとき孤独

巫女の鈴しやちんと梅雨の明けにけり

キャンプ張る一位大樹を父として

一雨に緊まりし縄目祭来ぬ

はらわたに祝酒あり田水沸く

蟬の木となりて樺の直立す

虹立ちて素焼の壺の忘れ傘

水無月のハープの弦のやうな雨

地核より弧が弧を生みし噴井かな

白シャツに風の香まとひ風になる

サングラスどここみて話しかけようか

千葉

坂 ようこ

茨城

工藤 進

人の世の濁りにとほく繭ごもる

衣更へて風聞追はぬ臍の位置

滴りの間合山河を大きくす

夏潮に真向かひちから身に移す

甚平派脛まつすぐに風捌く

つぎつぎと蛇腹伸ばしに雲の峰

佳き日とて鮎の蓼酢に深みあり

風の出で蜘蛛の囀月を掬ひけり

甘美なる七夕竹をくぐりゆく

末草水やさしくて浮きにけり

月丸く吸込みさうにカラー咲く

胴間声の解くとも綱立葵

水映ゆるあやめに適ふ黒を着て

無限記号たどる茅の輪の二度くぐり

炎昼や影にわが身を凝縮し

石川

安藤しおん

千葉

齊藤 實

茨城

廣島 泰三

内山 照久

サーファアの波の刃渡り九十九里
復活を果せし貌で墓出づる
クロールの息つぎのたび目が合ひぬ
手繰り寄す浅瀬に鮎の翻る
房州の団扇づくりの老居職

千葉

小松 誠一

箱尺を纏のごとく持ちて汗
白繭や薄暗がりの中二階
大輪の薔薇に微熱の息づかひ
叱る子の無くて古びし籐寝椅子
うすものに風の生まるる交差点

愛知

三好 智子

六月の信濃濃みどり薄みどり
ぼうたんの彩足してある天井画
ほうたるや地球は水の万華鏡
霊峰や黄菅織り込む野のうねり
うす紅の命つばむや古代蓮

長野

矢崎すみ子

蒲の穂の高さを風のひとわたり
膝操りに香水ふはと近づけり
風入れや柄革古ぶ子の竹刀
朴の花まで無垢の雲下りてきし
アルプスの見ゆる村なり青棚田
太陽のぐらりと揺れて蓴舟
干鱈煮る習はし今に夏祭
梅雨晴間往復はがきの切り取り線

東京

菊地 光子

新潟

長谷川 春

舫ひ綱一直線に雲の峰
日蓮の太き御眉夏木立
ハンカチをひろげて貰ふ蟬の殻
冷奴くづしてつつがなき一日
浮いて来る水母にありし深情
忽ちのうちに夏暁汚さるる
わが身体他人事となる炎昼下
海彦の星の香洗ふ青岬
神輿昇くきしきしきしと男肩
大南風昼月峰に吹き上ぐる

神奈川県

菅原 健一

東京

中尾 公彦

新人賞予選句（九月）

甚平の自在のなかに居て不安
キャンパス張る一位大樹を父として
白シャツに風の香まとひ風になる
滴りの間合山河を大きくす
風の出で蜘蛛の団月を掬ひけり
無限記号たどる茅の輪の二度くぐり
クロールの息つぎのたび目が合ひぬ
箱尺を纏のごとく持ちて汗
叱る子の無くて古びし籐寝椅子
ほうたるや地球は水の万華鏡

林 昭太郎

坂 ようこ

工藤 進

安藤しおん

齊藤 實

廣島 泰三

内山 照久

小松 誠一

三好 智子

矢崎すみ子

沖作品 選後句評

*
能村研三

甚平の自在のなかに居て不安 林 昭太郎

薄地で作った筒袖をつけた夏用の単衣。仕事着や普段着に使う。私はあまり着ないが、先師登四郎は晩年好んで着ていた。先師の句には、「甚平を着て今にして見ゆるもの」「甚平を着てにこりともせずにある」「しつかりと緊む甚平のかくし紐」などがある。素肌に着ると涼しいもので、よく家族ばかりの時は下着のまま居る人も来客を應對するにも、甚平を着ていれば許される。その着心地はまさに作者の言うとおり自在であるが、まかり間違えたらだらしがなく見えるから、着る人の心持がしつかりしていないとんでもないことになってしまう。人間の日常生活の衣装、着るものによって緊張感が緩んだり、その精神のあり方も変わってしまうから恐ろしいものだ。そんなことを十分知っている作者も、その着心地の易さから一度は着てみたものの、何か精神的な不安を覚えた。もう一句「炎昼や東京といふ巨き筒」の句、夏の太陽に灼きつけられた東京という大都会も、何か無力な巨きな筒に見えた。

キャンプ張る一位大樹を父として 坂 ようこ

最近のアウトドアブームも少し落ち着いたようだが、オートキャンプなどキャンピングのやり方も一昔前とは随分様変わりした。私も中高生時代に何も設備が整っていない野山で實際テントを張ってキャンプを楽しんだことがある。キャンピングの醍醐味は都会生活では味わえない空気、自然や景観、不便だからこそ味わえる家族や仲間のおふれあいを求めることにあるが、なかなか純粹な私たちのキャンプが行われなくなったのも事実である。しかしこの句は、正統な良識のあるキャンパーのようで、家族の中にあつてテントの張り方を子供に教える父親の大きな存在も見えてくる。一位の木は、高さ二十メートルにも及ぶ針葉樹で、飛驒の一刀彫などに使われる木である。もう一句「巫女の鈴しゃらんと梅雨の明けにけり」の句、西東京の句会の折に出会った句であるが、「しゃらんと」という擬態語が効いている。

白シャツに風の香まとひ風になる 工藤 進

「風の香」「風になる」と「風」をリフレインとして表現していることで成功した句。リフレインも余程うまく使わないと、しつこくなる場合もある。畳み掛けることで、その内容を強調し、さらなる演出も可能となる。夏用の白の開襟シャツなどは清潔な感じを与え、暑苦しい夏は一抹の清涼感を感じさせる。白シャツを着た若者が自転車漕ぎ始め、折から吹いて来る風に立ち向かった。心地よい風に触れて、風の香りを味わいながら、そのスピードが加速するにつれ、人間の動きは風と一体となった。もう一句「虹立ちて素焼の壺の忘れ傘」の句、日常吟であるが、「虹」と「素焼の壺」の色合いが心になじむ。